
[The magic bibles]

マポリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「The magic bibles」

【Nコード】

N3199T

【作者名】

マポリー

【あらすじ】

「もしも、生きることが”苦”になるならば……」 強大な敵”帝国” それに立ち向かう少年達。 この二つの力がぶつかり合う時、本当の未来が動き出す――。

ファンタジー小説「The magic bibles」 よろしくお願ひしますm(____)m (アドバイス、理由ある批評、辛口感想は大歓迎です。もちろん、普通の感想もお待ちしています。)

この小説はSNSサイト「GREE」においても連載中です。

用語設定集（前書き）

本編にて登場する用語の解説です。
詳しく知りたい時にどうぞ。

現在までのネタバレ有

用語設定集

【ルーガル王国^{るーがるおこく}】

大陸一つを治めた大国家。

三百年前に帝国を責めてきた時、前線で戦い帝国を追い返したと言われている勇者の直系が、代々国王を務めている。

また、城があるルーガル城下町には、ある大きな魔術が掛けられているという噂がある。

【帝国^{ていこく}】

北の海からルーガル的大陸に侵入してきた、国の俗称。

ルーガル王国は幾度も襲撃されてきたが、その度に追い返してきた。

好戦的で、科学力も高い。これまでの襲撃で、目的はルーガルの大陸を支配することと安定している。

また、北の大地を拠点とし、そこに建てられた城には誰にも負けぬ力を持つ王がいると言われている。

【衝撃弾^{しゅうげきだん}】

飛び道具。主に衛兵が使う。

弾を地面に叩きつけたり、対象に当てるといったような強い衝撃を与えることで、その数百倍の衝撃を半径二メートル以内に起こす。殺傷能力がある為、王国では所持することすら犯罪になる。

用語設定集（後書き）

新しい用語を追加した時は、後書きにてお知らせします。

プロローグ（前書き）

閲覧ありがとうございますm（＿）m
駄文ですが、これからも読んでいただけると嬉しいです。
それでは

ファンタジーの世界へL e t ' s g o

プロローグ

俺が、全て間違っていたんだ。

街を出たことが人生最大の失敗……いや、成功でもある。

あの判断があつたからこそ、今の自分があるのだから……

地球に存在する全ての者には”力”がある。

その力を使えば、仲間を守り、敵を退けることもできる。

”力”には多種多様な特徴がある。

全てを燃やす、”紅き力”

全てを沈める、”蒼き力”

全てを貫く、”黄の力”

全てを癒す、”緑の力”

全てを制す、”無の力”

そして……

全てを染める、” 闇の力 ”

紅、蒼、黄、緑、無の力達は互いを高めあい、成長する。

しかし、闇の力は、他の力を勝ることにより成長する。

全ては、定められた力……

俺達は今、街の門の前にいる。

もちろんここからは未知の世界。

でも、行ってはいけないと忠告する俺の心を、好奇心が押さえ付け
ける。

俺達は、門へと歩きだした。

そして……

俺達は今、牢獄にいる。

第一話「牢獄」

ゆっくりと体を起こす。

まだ体の節々が痛む……。俺は周りを見渡した。

ほとんど何もない。あるのはコンクリートでガッチリ固められた壁と鉄格子、そして倒れている友達五人と……。老人が一人。

俺は倒れている一人に近付いた。

「おい……」

揺すっても起きない……。

「おいパレス！」

パレスがゆっくり上半身を起こした。眠そうに目を擦っている。

「ここ……どこだ？」

俺が鉄格子の方を顎でしゃくる。

パレスもそちらを見た。

「まさか……」

「そのまさかだ」

ここは平和”だった”ルーガル王国。その平和が破れたのは、約16年前……

その日、帝国が責めてきた。しかし王国の大臣達はすぐに動かなかった。なぜなら今までに何回か帝国は、ルーガル王国へ責めてきていたからだ。勿論、毎回帝国を追い返した。そうしている内に、帝国に恐怖を感じなくなっていた。しかし、それがそもその間違。今回の兵力は前回とは比べ物にならないほどだった。そのまま、王国は為す術も無く、侵略されていった。帝国は数々の村が破壊し、北の大地を拠点とした。そして、今までに色んな人を帝国の奴隷として捕まえ、酷い労働をさせてきた。

実は、俺が生まれたのは丁度帝国に攻め込まれた日。

そのせいか、昔から帝国には他の人の何倍も恨みを持っていた。

「俺達は……捕まったのか？」

「そういうことだな」

パレスがうつむく。

「そんな落ち込むな」

俺がパレスの肩をポンポンとたたく。

「よくタクトはそんな呑気でいられるな！」

パレスが俺の手を払いのける。

「ま、まあ落ち着け。今叫んだってどうにもならない」

俺はパレスを説得するように言った。

「……今まで帝国に捕まって帰ってきた人は……？」

パレスがゆつくりと顔を上げる。目が赤く染まっていた。

「い、いないけど……」

「そうだろ！捕まったらもう終わりなんだ！」

そう言って、パレスがまたうつむく。

「でも……帰れる可能性がない訳じゃない。ほら、かの有名な三代目国王も言っただじゃないか、『諦めた時が負けだ』ってさ」

パレスはまだうつむいたままだ。

「とりあえず……パレスは寝ときな。うつむいてたってどうにもならないしさ……」

「……そうするよ」

パレスはうつむいた顔を一度上げ、俺に微笑みかけると、身を横にした。

あれから約一時間……

俺はこの少ない人生で得た知識をフル活用して考えていた。

自分の為、親友の為に……

ここから逃げる術を

第二話「脱獄計画」

と、いきなり、図太い声が部屋に響いた。

「さあ労働の時間だ！全員起きてるか？」

見た目からすると、どうも見張りの衛兵らしい。

俺は部屋を見渡した。

俺以外の四人はいつの間にか、起きていたらしい。上半身だけ起こした状態で座っていた。

老人も、あぐらをかいて、座っている。

「全員起きてるな？よし、出る」

そう言って、衛兵が鉄格子のドアを開けた。

ゆっくりと、垂れ下がった縄に手をかける。

これを引っ張れだど？馬鹿げている！

頭の中を、そんなフレーズがよぎった。

何せその縄は、百キログラム近くありそうな岩をたった一本で縛っているのだ。

なんとか引っ張って上げようとするが、もちろん、こんな大人も上げれなそうな岩を、子供一人で上げれる訳がない。

俺は、引っ張っているのを装いながら、周りを見て、暇を潰した。

カンカン、と低い鐘の音が響く。

「今日の労働はお終いだ！しっかり休め。明日の為に……」

見張り台に乗った衛兵が、声を上げる。

待ちわびた言葉。俺は言葉が聞こえると同時に、縄から手を離れた。

真夜中……

俺は、他の四人と老人に囲まれて、座っていた。

友達の一人、ラックが静かに口を開く。

「なんだ？こんな夜中に……」

「まあ静かに聞いてくれ」

そう言っでラックを促す。

俺は静かに続けた。

「今、俺達は帝国に捕まり、牢獄にいる。そして酷い労働……いや、拷問をさせられた。お前達は耐えられるか？」

「ううん、僕は耐えられない」

そう言っで、友達のレオンが口を開く。

「そうだろう？だから俺達は動き出すんだ……」

と、遮るような声が聞こえた。

「ちょっと、それってどういうこと？簡潔に話して」

友達のアリスだ。

「まあ待てよ。ここからが本題なんだから」

そう言っで、アリスを促す。

「俺達は自分達で未来を掴むんだ。だからする……」

皆が唾を飲み込む音が聞こえた。

「脱獄だ」

第三話「謎の部屋」

「……何か異論、又は質問がある奴は？」

俺は一通り作戦を言い終えると、静かに聞いた。

と、レオンがおずおずと手を挙げる。

「なんだ？」

「武器と衝撃弾は……どうやって調達するの？」

「衝撃弾は、実行前日の夜にでも、あの衛兵から取ろう」

そう言っつて、鉄格子の外にいる衛兵を顎でしゃくつた。

「武器は、無くても大丈夫だ。しかしあつたほうがいいだろう。まあそこまで重要じゃない。他は？」

誰も口を開けようとはしない。

「……ないな。ならゆっくり休もう、明日の為に……」

数分後には、僕の声がいびきに変わっていた。

ゆっくりと目を開ける。

上半身を起こすと、鉄格子の付いた窓に目を向けた。

暗い。まだ夜らしい。

俺はもう一度寝る為、上半身を倒そうとした。と、その時、

——君には力がある——

「え？」

耳を貫くように声が聞こえた。しかしうるさい訳ではない。

——君のような逸材を失うのは悔しい。こちらへ来い——

と、目線の先にある壁が揺らいだ。

俺は、ぎょつとして目を見開く。

「俺が……なんだって？」

しんとしている。

俺は空耳かと思い、もう一度寝ようとした。と、その時

「うつ……」

頭を痛みが貫いた。壁の揺らぎを見つめる。

「強制つて訳か……」

俺は寝起きで重い体をゆっくり立たせると、揺らいている壁の前に立った。

——手をかざせ——

さっき聞いたのと同じ声。俺は言われた通り手をかざす。

揺らぎが徐々に激しくなっていく……止まった。と、その瞬間に壁の揺らいでいた部分が無くなった。

「え？」

またしても目を見開く。有り得ないことばかりだ。寝起きの心臓には悪すぎる。

——入れ——

入るには十分なくらいの大きさ。

俺は壁の中に足を踏み入れた。

中の壁はコンクリートではなく、土。洞窟みたいだ。

——進め——

俺は、100m程先に見える扉へ向けて、ゆっくりと歩を進めた。

扉の前に立った。ここだけ、天井が今までの二倍程高い。

目の前にあるのは、いかにも重そうな、木の門。

俺は扉の右の取っ手を両手で持ち、少し押してみる……

開かない。

今度は、全体重をかけて押す。

扉はギィィ……という音をたてながら、ゆっくりと開いた。

扉の間に出来た隙間に体を滑り込ませ、中に入る。

と、俺は驚愕した。そこにあったのは……

——武器。それも軽く200は越えていそうな数。

その武器は、ドーム場の形をした部屋の周りに、並べられていた。

……これは夢だろうか？さつきから、起こっていることに現実味が
ない。

少し頬を引っ張ってみる。痛い。

もっと強く引っ張ってみる。

「痛っ！」

……自分でやっておいて、『痛っ！』って……

いや、そんなことはどうでもいい。一番大事なのは、ここが存在しているのが、現実だということだ。

俺は、脱獄する時、スムーズに武器を取れるよう、扉を開け放っておくことにした。

俺は左のドアを開け放つと、取っ手から手を離した。

「さあ、寝よう……」

俺は欠伸をしながら振り返り、足を進めていく。

……これは現実なんだ。ならどうやってこの部屋が存在していた？ここは他の牢屋があるはずだ。

それに、何故武器があつた？誰かがあの謎の部屋に置いていったのか？それとも昔から、あそこにあつたのか？

……とりあえず明日の夜にでもこの話をしないと……

そんなことを考えている内に、いつの間にか出口まで来ていた。

ゆっくりと、洞窟から出る。

振り返ると、もうそこに壁の穴は無かった。

第四話「合図」

「今言った通り、武器はこの牢獄の人数分程度はある。あとは……」

俺が続けようとすると、俺のものではない別の声が、遮った。

「そんな話を信じろって言うの？」

アリスだ。声は抑えているが、怒りのようなものがこもっている気がする。

「確かに、信じるのは難しいと思う。でも、あの時俺は確かに、温度を感じて、匂いを嗅いで、物を触った。そんな感覚は、夢に無いだろう？」

アリスが口をつぐむ。俺は続けた。

「もちろん、信じられないなら信じなくていい。俺だって証拠と言え、感覚があった、くらいしかないからな」

一度口を閉じて、皆の返事を待った。しかし、予想に反して返事が返ってこなかったので、また口を開いた。

「地図と衝撃弾は、その衛兵から盗れるな。なら……脱獄は明後日決行する」

「少し早すぎやしないか？」

これはラックだ。

「作戦は早いほうがいい。帝国に気付かれたら、それこそ、ここから出られなくなる。……明日、この人達に『明日決行する』と、できるだけ多くの人に伝えてくれ。俺は予想外のことがあった時の指示を考えておく」

口を閉じ、一度深呼吸する。

全員の顔を見た。真剣そうだったり、うつむいていたりと様々だ。

「じゃあもう寝よう。明日の為に……」

昼から、大体の事態への対策は考えておいた。と言っても、完璧と言われるには程遠い、浅はかなものだ。

俺は、目の前に置いている、突起が幾つも付いている球体、衝撃弾を見て、言った。

「その衛兵が持っているのは、これだけだった。とりあえず、衛兵に捕まった時の為に、ここにいる全員分欲しかったんだが……」

衝撃弾とは、衛兵が持つ飛び道具のことだ。衝撃弾に強い衝撃を与えることで、殺傷能力のある衝撃を放つ。だから帝国では、重宝されているのだ。

ここに居るのは、俺と、友達四人、そして年配の男。

「そういえばさ……」

突然、レオンが口を開いた。とつさにそちらを向く。

「なんで僕達の方だけなの？衛兵に捕まった時の為なら、こここの牢獄に捕まってる全員分用意しなくちゃいけないよ？」

「俺達は、今回の脱獄の主謀者だ。衛兵に捕まって、そのことがバレたら、酷い……それこそ死にたくなるくらいの拷問を受けるだろう。そうなることを防ぐ為に、自ら死を選ぶんだ」

少し口を閉じ、一呼吸置くと、また口を開いた。

「ネガティブな気もするが、仕方ないんだ……」

「そういうことなら、わしはいらんよ」

年配の男の言葉に、顔を上げる。

「こんな老いぼれには、衝撃弾を投げる隙すら与えてくれんじやろ
うよ」

そして、弱々しく微笑んだ。

「ありがとうございます」

俺は、男に一礼すると、傍らから地図を取る。

「次は……」

衝撃弾を、左手でそつと横によけると、地図を地面に開いた。

「いいか？ 作戦はこうだ——」

今日は朝から調子がいい。頭は冴えてるし、体はよく動く。

労働部屋に設置されている、大時計を見た。

短針が十を差している。もうそろそろだな……

俺は、岩に縛っている縄からゆっくりと手を離すと、大きく手を叩いた。

パンという澄んだ音が、辺りにこだまする。

一斉に、衛兵の目がこちらを向いた。

昨日、俺が言った言葉が頭をよぎる。

『手を三回叩いたら、脱獄の合図だ』

二回目を打ち鳴らした。

今度は、空気が変わった感じがする。

そして……

「行くぞー!!」

そう言いつと同時に、手を叩いた。

第四話「合図」（後書き）

用語解説に、「ルーガル王国」「帝国」「衝撃弾」を追加しました。

第五話「声が継げる時」

小走りで牢獄に続く階段へ向かった。走らないのは、衛兵を引き付ける為だ。

ある程度引き付けたことを確認すると、一気に階段を駆け降りた。そのままの勢いで、俺が寝起きしていた牢屋へ向かう。ちなみに一番奥の牢屋だ。

開け放たれている鉄格子を潜り、一昨日の晩に見つけた洞窟の入り口である壁の前に立ち、手をかざした。

「——開け——」

俺がそう念じると、瞬時前方の威圧感が無くなった。壁が消えたことを確認しようと目を開ける。しかし、目の前の光景は予想していたものと少し違った。

——扉がすぐ前にあるのだ。開け放ったのもそのまま。だが、それに驚いている場合なのは俺が一番知ってると思う。

そう自分の中で結論づけた瞬間に飛び出す。すぐ横にあった足の長さ程の剣を取り上げようと屈んだその時、

背後にとてつもない気配を感じた。恐怖とも、力ともれそうなそれを漂わせていたのは……

剣だった。台座に差し込まれた、厳かな気配も漂わせる剣。

引き寄せられるように、俺は剣に歩み寄る。

よく見ると、剣の周りからは白い何かが出ていた。それを不思議の思いながら、柄に手をかける。

一気に引き抜いた。

スラツとした直刀。長さは片腕の一、五倍程度だ。刃の光沢はついさっき研いだばかりなのではと思う程眩しい。そんな見た目とは裏腹に、ずっしりと重く、支えることすら危うい。

台座の下にはめ込まれていた鞘を取ると、背中にかけ、剣を下に構え洞窟を出た。

牢屋の前には衛兵は来ていなかった。素早く鉄格子を潜り抜ける。廊下の先を見た。奥の方で衛兵達が蠢いている。数人が入ったせいで詰まったのだろう。

俺は突きの体勢で構えると、蠢く衛兵へ勢い良く突進した。

どんどん距離が狭まる……。

——鮮血が飛んだ。刺さった二人が小さく呻き声を上げ、その後痙攣すると動かなくなった。剣を引き抜くと崩れ落ちた。

「んの野郎お……」

横に居た衛兵が憎しみを込めて呟くと、高々と衝撃弾を掲げ俺の足元に投げつけた。

一メートル程後ろに跳んだ後、剣を斜めに構え、防御の体勢をとる。

——瞬間、爆音が廊下をこだました。

体全身に衝撃が走る。だが即死範囲は免れたらしく、痛むのは手の指と右膝だけだった。

衛兵の方を見る。残りは三人。なら……

剣を上段で水平に構えなおし、再び突っ込む。正面の衛兵の表情に猥褻の念が感じられたが、躊躇っている暇はない。三人の中心にきたことを確認すると、右足を軸に左足で思い切り地面を蹴って回転した。

回る世界の中で、生々しい音と共に生温い何かが体を染めているのを感じる。

三回転程して左足を下ろす。正面の衛兵は口と胸から体力の血を流しながら倒れた。

胸が苦しくなる。左手で剣を持たせ、右手で自分の胸を掴んだ。

俺のやっていることは、本当に正しいんだろうか……？ コイツらだって一応は生身の人間。ほら、目の前で苦しんでるじゃないか……。俺はなんて罪深いことを……

——自我を見失うな——

あの時の声が遮った。瞬間、辺りの時間が静止した。俺の体も動かない。

「何を……した……」

口だけパクパクさせて、そう念じる。

——何、ここであのまま話すのは危ないと思っただけのこと。君に害を加えるつもりはない——

今日はやけに口数が多い。何かあったのか？

——俺の力が強くなったんだ——

「へ……？」

心を見破られた？　なんで……

——心に語りかけてるんだ。相手の心の内くらい簡単に読める——

「——そうか……。力が強くなったというのはどういつことだ？——」

——……君に近くなったとも言おうか……おっと、これ以上は言えない。それより、俺にこんなことを聞くより大事なことがないか？——

「——……そうだ。早く行かないと……——」

一瞬、間が空いた。その後、ハッと息を飲む音が聞こえる。そして声が聞こえた。

——…いいか？ 何があっても自我を失うな。その時点で君の未来は終了する。絶対に、自我を失うなよ——

何故『自我を失うな』ということを強調したのか問おうとした時には、体は自由になっていた。

声のことは一旦諦め、剣を構えなおし、階段を駆け上がる。

目の前には大量の衛兵が俺の進行を阻むように立っていた。ほとんどは衝撃弾か剣を構えているが、一部はトゲのついたグローブを付けている。

剣を持った一人が先陣を切ってこちらに向かってくる。右手に持った剣を力任せに振り抜き、その勢いで自分の目を逸らせた。

側頭部に生温い液体がかかる。向き直り、剣を真っ直ぐ持って衛兵達の真ん中に突っ込んだ。

一人に刺さってしまい、咄嗟に目を逸らす。

衛兵の壁を抜け、突っ込んだ反動で衛兵から剣を引き抜き、そのまま風ぎ払った。

手応えはない。それなのに前方で立っていた衛兵達の肉片が辺りに飛び散り、鮮血が汚い床をさらに汚す。

もう、人を切るのは嫌だった。嫌なのにやらなきゃいけない。その思いだけで俺は剣を振っていた。

「行け！！」

剣を返すようにもう一度風ぎ払いながら言い放った。また三人の衛兵が地面に崩れ落ちる。

衛兵の呻き声をこちらに向かってくる足音が掻き消す。

後は前に二人、右の奥に一人いる。

前の二人が同時に切りかかってきた。怯える心を抑えて、左の衛兵の胸に突きを入れ、それを軸に回転して右の衛兵の攻撃を避ける。

回転した勢いで剣を引き抜き、右の衛兵の頭の方へ切り上げた。

仰け反って血を吹き出しながら、倒れる。倒れてきたもう一人の衛兵を押し退けると、壁の角にいる衛兵へ突っ込んだ。

丁度胴の中心に剣が刺された。衛兵が吐いた血が顔にかかる。空いた左手で拭うと剣を素早く抜いて、部屋の広い方へ向き直った。

多くいる中の三十人程が問題なく階段に向かう――はずだった。

確かに数人こちらに向かってきているが、一人、衛兵に捕まっていた。

俺のとても近くで、過ごしてきた親友。それは今、衛兵に持ち上げられるように捕まっていた。

そいつはズボンのポケットに手をつ込み、黒い球体を取り出す。その瞬間、何をしたいのかはつきり分かった。

「レオオオオン!!」

俺が名前を呼んだそいつは、手に持った衝撃弾を地面に投げつけた。

第六話「恐怖からの逃亡」

数瞬後に爆音が轟き、咄嗟に腕で庇う。

その後腕を降ろし、そちらを見る。……予想通り、そこには二人の人影が倒れていた。一人は大柄な男、もう一人は少年……

よたよたと駆け寄り、レオンのすぐ手前で転んだ。四つんばいのまま、冷たい地面に倒れている親友を見る。

「レオン……俺達ここから逃げるって言ったよなあ？ 死んだら何もできないぞ？」

レオンの目を見る。光が無くて、冷たくて、それでいて深くて……

「うわああああー!!」

俺が……俺が弱いから……！

そうだ。アイツをやるう。レオンを死に追い詰めたアイツを。

そこに転がっている衛兵を睨み付け、立ち上がり剣を取る。

縦に持ち、振り下ろした。衛兵の脇腹にそれが突き刺さり、血が溢れだす。

もつとお、もつとだ……

柄を回して傷口を広げた。辺りに血と肉片が飛散する。

まだだ……コイツは徹底的に……

と、いきなり肩を捕まれた。

「邪魔をするな!!」

振り返りながら剣を風ぐ。これでまたこの衛兵を……

——囚人。俺が今斬ったのは囚人だった。血が辺りに飛んで、糸が切れたようにその囚人が崩れ落ちる。

違う、俺が斬らなければいけないのは衛兵。囚人は仲間……

俺は、仲間を斬った……？

嘘だ……斬らなきゃ……衛兵を斬らなきゃ……

「うわあああ!!」

すぐに近くの衛兵に向かって走りだす。その衛兵は避ける暇もなく俺が持つ刃の獲物となった。

もっと……もっと斬らなきゃ……

もっと………斬らなきゃ？ 衛兵にも命があるのに？

——違う。憎むべきは衛兵じゃない。憎むべきなのは帝国だ。衛兵個人は憎むべきじゃない。

「ごめん……でも、ありがとう」

俺は今斬った衛兵にそう言い残すと、部屋から伸びる通路へと走りだした。

そうだ、殺された仲間の為にも帝国を潰さなければ。そうしないとレオンも衛兵も報われない。

通路に入る頃には数人の衛兵が俺を追ってきていた。俺が狂気の殺人鬼だと知って尚も、任務を続行するらしい。俺にはその任務を完遂させる義理なんて無い。あくまでそれとこれとは別だ。ただ、今となつては衛兵を斬ることはできないだろう。

奥に扉が見えてくる。あの地図がダミーでないことに少しほっとした。

扉のすぐ前まで来た。すぐにドアノブがあるであろう位置に手を持っていく。

無い。反対か。

ここにも無い。……無い？

素早く扉を見回す。

無い。無いのだ。ドアノブが。

すぐ後ろで足音が聞こえている。あと数秒で俺の背中に……

パニックになって扉にタックルする。勿論開かない。押したり持ち上げたりしてみたが動く気配すらない。

自棄になって扉を叩く。

元から成功する自信なんて無かった。でも弱い自分が嫌だった。だから弱気な心を押さえつけて……

——君の願いはなんだ？——

——ハッと顔を上げると周りの動きは止まっていた。そう、さっき階段の前で聞いたあの声。しかし、今回は先程と少し違う。

「俺の……願い？」

……俺だけは動ける。振り返って、通路の何もない天井を見上げた。

——そう、願い。君が今どうしたいか、君は今どうするべきか——

「俺は……」

剣をゆっくりと引き抜く。とても真っ直ぐで、純粹に輝いていて

……

「……俺は、生きたい。まだやらなきゃいけないことは山ほどあるんだ」

——そうか……——

声が一瞬の間をあけて、また喋りだした。

——剣の柄の先端に宝玉が埋め込まれているだろう？——

柄の先を見ると、声が言った通り紅い宝玉が埋め込まれていた。

——それは魔力を増幅させる石だな。その扉は魔力で封じられていて……——

「魔力……って？」

——要するに力だ。腕力ではない、霊的なもの……とても言おうか。その石を伝って君の魔力を扉に流し込めば、そこから出られる——

「流し込むって一体どうやって……」

——では、健闘を祈る——

またしても、俺が問う前に声は消えてしまった。

周りは既に元の様に時を刻んでいる。止まっている暇はない。

手に持った剣の柄を扉に押しあてた。そのまま押してみる。

……駄目だ。腕力じゃないって声も言ってたじゃないか。

剣を持った右手の二の腕を左手に持たせ、力を込める。

今度は、扉が少し揺らいだ。込める力を大きくするにつれて、扉の揺らぎも大きくなる。

これでやっと……

……いや、そんな上手くいくはずは無い。扉の揺らぎは一定の大きさに止まってしまった。

もつと力を込めろ……。そんな気持ちだけが空回りする。

後方で剣を振り上げる風切り音が聞こえた。数瞬後には俺の無防備な背中に斬撃が叩き込まれる……

嫌だ、嫌だ嫌だ!! 早く、早く……

「早く!!」

——瞬間、扉が消えた。無意識に体重をかけていたらしく、前方につんのめる。

まだ……追ってくる。

いつの間にか俺は走り出していた。

どれだけ走ったか、追ってきているかなんて分からない。止まったら後ろから追ってきた衛兵に剣を突き付けられる気がして止まらない。

……そうして走っている内に、俺は気を失った。

第七話「真実と感情」

「ん……ん……？」

パチパチという薪が爆ぜる音で目が覚める。上体を起こし、頭を掻きながら辺りを見回す。どうも森の中らしい。

「お、起きたか」

と、後方で聞き慣れた声がした。座ったまま体をそちらに向ける。

「パレス？」

そこに居たのは紛れもなく、親友のパレスだった。

「なんでパレスが？」

「そりゃあお前を探さなきゃいけないと思ってな」

『ありがとう』と言いかけて言葉をぐっと飲み込んだ。今は弱気な自分を見せたくない。気を取り直して口を開いた。

「そうか……無事で良かった」

「そうなんだが……体、どうともないか？」

「いつもと変わらないけど……なんで？」

「いや、見つけた時、周りの草が燃えてたんだ」

「…………燃えてた!？」

俺がぎよつと目を見開く。それに驚いたのか、パレスは少し仰け反った。

「あ、ああ、灰になってた。タクトの周りだけ。だが体には火傷も……いや、傷一つ無かったんだ」

「そうか……。今言った通り、俺はいつもと全く変わらないから、心配はいらないぞ」

「ならいいんだ。あまり重要なことでもないだろうし……」

「あ、そういえばレオンはどうなったんだ？」

俺は山ほどある聞きたいことを順番に潰していく為に、パレスを遮って疑問を投げかけた。

「レオン……。か。とりあえず衛兵を全員殺した後……」

…………殺し…………た…………？

……嫌だ、俺は悪いことなんてしていない。あの時の犠牲は仕方なかったんだ。

なら誤って刺した囚人はどうなる？ 必要な犠牲だったのか？

嫌だ……俺が悪いなんて……

「うわああああ!!」

……俺がひとしきり叫び終わると、辺りは静まり返っていた。先ほどと同じ夜の平穏。

「だ……大丈夫か？」

隣から心配そうな声が聞こえてくる。その瞬間、意識を取り戻した。驚いた表情のままでそちらを向く。その表情を真顔に戻してから口を開いた。

「俺……叫んでたか？」

「ああ、耳が裂けそうな程な」

俺は三角座りになって焚き火に視線を移した。

「ごめん……。俺、分からないんだ。衛兵を殺して本当に良かったのか……」

「でもアイツらは人を苦しめる悪で……」

「そんなことをさせているのは上の奴だろう!? アイツらにはなんの罪もないはずなのに!!」

沈黙。重い空気になってしまった。余計話しくくしてしまったようだ。

「ごめん……。罪が無い訳じゃないよな。現に俺達はあの牢獄に連れてこられたんだし……」

「でも衛兵が全て悪いということも無いのは確かだ。衛兵を動かす人間がいるんだからな」

パレスは相変わらず無表情だ。俺もこんな冷静になれたらとつくづく思う。

「ありがとう……。レオンの話なんだが……」

「あ、ああ。その後様子を見たんだがやはり……。とりあえずレオンのことはラックとアリスに任せて、俺はタクトを探しに来た、っていう経緯だ」

「で、今に至ると」

「そういうこと」

そう言つとパレスは、微笑みながら俺に向けて右手の親指を立てた。

「それで、これからどうするんだ？ ラック達と何処で落ち会つかも決めてないんだろ？」

「ああ、とりあえず城に帰ろうと思う。街を経由して何週間か、かかるだろうけど、多分ラック達も城を目指して帰ってくるはずだ」

「……その間にももしも衛兵に出くわしたら、パレスに任せていいか？ 今は倒せる気がしないんだ……」

「ああ、いいぞ。俺だって無理に戦わせてまた一人親友を失わせるようなバカな真似はしないからさ」

拳を握り締めそれを神妙な面持ちで見つめる。多分握り締めた拳で殴り付けたい程衛兵を憎んでいるんだと思う。親友を殺されたのだから仕方ない。でも俺の気持ちは変わらず、衛兵を悪いと思えない。他人からしたらコイツは頭がおかしくなったとしか思えないだろう。

「ありがとう……俺みたいな弱い人間を想ってくれて……」

急に熱い物が込み上げてくる。今泣いて本当に役立たずだと思われたくないのか堪えた。

「何言ってるんだ。俺達は親友じゃないか」

……その一言だけでなんとか抑えていた涙が流れだした。顔を伏せて見られないよう隠す。

「さて、もう遅いし明日は移動するし、寝るか」

それを聞くと同時に『おやすみ』とだけ言っただけで体を横にした。早く寝て今日のことを忘れたい。

やれやれ、という声が発せられた後、パレスも眠りに着いた。それに安心して、目を閉じるといつの間にか俺は夢の中へと入り込んでいた。

その時には危険が迫っていたことを俺達は知る由もない。

第八話「火がもたらす涙」

「まだ……着かないのか？」

俺は重くなった足に心の鞭を打って、なんとか歩いてきた。朝起きて今まで歩き続け、かれこれ五時間くらい歩いただろうか。筋力の労働以外は全くしていなかった体に、長時間の運動は負担が大きい。

少し先をスタスタと歩いているパレスが口を開いた。

「そう弱音を吐くな。もうすぐだろうから……ほら、見えたぞ」

そう言った直後、パレスがぴたりと制止した。俺は待つてましたとばかりにそこへ飛び出す。

パレスの隣に立つて前方に目を凝らした。すると、草木の間から見える大草原の中に、ぽつりと一つ人工的な物が立っているのが見えた。その瞬間、付いていた重りから解放されたように足が軽くなった。希望に胸を膨らませながら、走りだす。と、

「止まれ！！」

パレスの声が聞こえたのは俺が走りだした直後。

「へ？」

急停止して振り返る。と、頬に微かな痛みが走った。

「いつつ！」

その痛みを感じた場所を手で撫でる。掌を見ると、それは血で赤く染まっていた。どこからか舌打ちの音が聞こえてくる。

「血？」「……ヤバイ」

俺が呟いた直後、パレスが俺の手を引っ張って走りだした。

訳が分からず振り返る。突如森の暗闇から矢が飛んできて、俺のすぐ横の木に突き刺さった。

「ひっ！」「早く！！」

パレスが俺の手を強く引っ張る。視線を前方に戻すと、パレスが必死に走っていた。

「……分かったよ！！」

俺は掴まれていた手を振りほどき、森の出口へスピードを上げた。

耳にヒュン、ヒュンという音が伝わってくる。音の数からして相手は複数だ。

森を抜けて少し進んだ所でパレスが止まった。少し遅れて停止し、後方に目を向ける。

まだ矢は飛んできていた。しかし、射程圏内はもう抜けている。飛んでくる矢は俺達の目前にある地面へ突き刺さるばかり。

俺は背中から剣を、パレスは腰から短剣を抜き、臨戦体勢を取る。

その後矢の雨は止み、代わりに茂みの中から武装した人間が三人出てきた。

「いつから追ってきたんだコイツら……」

多分あの牢獄で見つからなかった衛兵が幹部か何かに命令されて追ってきたのだろう。しかし、武器は矢を高速で放つ銃器ボウガンが二人に剣一人とチームを組むにはうってつけな編成だ。それほど俺達のことは危険だと思ったのだろうか。

パレスが地面を強く蹴ってボウガンを持っている衛兵に突っ込んだ。短剣を構え、兜と鎧の隙間へ突きを放つ。言葉に表しにくい声を上げて、その衛兵はボウガンを地面に落とした。

俺も負けじともう一人のボウガンを持った衛兵へ走り込む。その衛兵は矢が込められたボウガンを俺に向け、引き金を引いた。すぐさま右にステップを踏んでかわす。反射神経だけはいいらしい。

ジャンプして、右足で胸に蹴りを入れると、衛兵は前方に大きく吹っ飛んだ。着地後、倒れた衛兵に素早く飛び付き、馬乗りになって剣を振り上げ、それを見つめる。

……それは、とても悲しそうな目をしていた。純粹に恐怖を覚えている。それは今まで人を襲おうとしていた者の目ではない気もした。

それを見ると、剣を振り下ろす気にはなれなかった。自分が罪人だとすら思えてくる。殺さないでいい人間を殺そうとしている、そ

う感じた。

——瞬間、俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「タクト!!」

咄嗟にそちらを向く。しかし、視界は覆われていた、仲間の背中に。

その奥では、衛兵が剣を振り上げていた――。

鈍い音と共に鮮血が飛散する。俺と、仲間と、衛兵の体を赤く染めた。

「パレ……ス……?」

ゆつくりと、儚く、それでいて美しく……命が消えていくように地面へと崩れ落ちる。

嫌……嫌だ……なんで俺から仲間を奪うんだ……俺が悪いからか……?
なら俺を殺せばいいじゃないか。なんで仲間を……

ふと我に帰った。何気なく視線を上に向ける。

赤く染まった剣を振り上げる衛兵がそこにいた。咄嗟に横へ転がって避ける。その勢いのまま立ち上がって剣を構えなおした。

そうだ。今は生きなきゃいけない。コイツらを倒して、絶対!!

と、辺りが急に静かになった。そして体が急激に重くなったように、動きが遅くなる。この感覚は、あの牢獄でも感じたことがある。

——君の願いはなんだ？——

この質問は前にも聞いたことがある。そう、あの扉の前で。あの時は唐突で少し悩んだ。しかし今回ははっきりしている。悩む必要はない。

「——生きたい。仲間と共に——」

——そうか。ならば私の指示に従え。君がその願いを叶えたいならばな——

まるで決められた台詞を坦々と流しているような会話。しかしこの会話にはとてつもない意味がある、そう感じた。

「——ああ、従う——」

もう迷わない。何がなんでも生きるんだ。それしか今できることはない。

——前方に掌をかざせ——

右手をかざす為、剣を鞘に直そうとすると、案外簡単に手は動いた。先ほどと何が違うのか、俺にはよく分からない。

剣を鞘に直し、そのまま手を開いて前方に突き出した。

——手に魔力を込める。扉を開けたあの時のように——

少し考えて感覚を思い出させる。左手で右腕を掴ませ、掌全体にまんべんなく力を込める。

——目を閉じて、それを掌の前方に流すんだ。丁寧に、力強く——

ここからは手探りだ。掌の力を押し出すようにして、掌の前方に丸く溜めるような感覚。

——そう、それでいい。あとはそれを飛ばすだけだ。では健闘を祈る——

瞬間、辺りの空気が軽くなった。またしても俺が質問する前に声は消えたのだ。しかし戸惑う必要はない。あの声は、俺に不可能なことなどさせない。

衛兵が迫ってくる。俺はまた目を閉じ、腕に力を入れ直した。

大丈夫……俺ならできる……

先程の感覚を思い出しながら、力を掌を前方に流し込み続ける。

少しそれ続けると、体から掌の前方への道筋が出来たのか、力が滑らかに流れるようになった。ここぞとばかりに力を込める。

できる……俺なら……

力を入れていると徐々に掌へ反発する圧力がかかってくる。これが魔力の性質なのだろうか。それと同時に掌が熱くなっていく。ま

るで火に手を近づけているかのように。

集中しろ……不可能じゃないんだ……

遂に掌へかかる圧力で、腕が震えだした。力を溜めるにはこれが限界だ。力を留めながら衛兵の足音に集中する。

後七歩……五歩……二歩……一歩――。

目をカツと見開く。頭に浮かんだ文字をそのまま叫んだ。

「万物をも溶かせし炎よ、力を我が手に。――『ファイア』!!」

掌の前方では紅い球体が浮いていた。それが高速で二人の衛兵に衝突した。直後辺りに爆音が轟く。その球体が衛兵に衝突して爆発したのだ。

やった……のか？

足から力が抜け、膝をつく。二つの炎上している人影を見ると、出したくもないのに涙が出てきた。

俺は、数分間涙を溢しながらそれを見つめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3199t/>

[The magic bibles]

2011年11月17日19時12分発行